

祝400号—研究部における活動の継承と発展—

静岡大学名誉教授 吉原崇恵

本機関誌は年に8回の発行であるから、少なくとも50年を経ているということになる。発行回数は時期によって変動があったかもしれないが、それにしても「すごい！」と普通では表現する。1回の発行に込められた歴代の担い手のエネルギーを知らされるからだ。担い手には授業者、編集者、背景に企画者グループがいるだろう。顧問の先生方の存在もしっかり見える。そしてこれらの担い手はバトンリレーである。次から次へと。

緊張して担った(であろう)その昔の若い世代が、ベテランになり後進を援け、重責に着かれる様を、まぶしく見届けることが出来てきた。

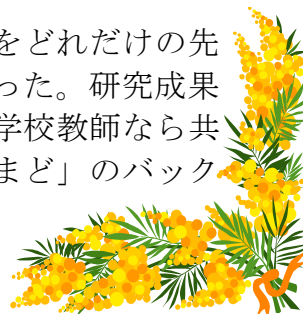
ところでこのような研究活動の節目には、今後何を継承し発展させるかを問うことが求められる。

浜松市小学校家庭科研究の継承する大黒柱は何だろう。問題解決学習過程、子ども同士の協同の学びの場の設定、または時代を先取りする生活課題から求めた着きたい力の設定か。これからも研究は続き教研集会などの発表も常連で続けてほしい。次に発展課題は何だろう。

たとえば「基礎」と「基本」の区別と関連、「実践的」と「体験的」も同様だ。これらの概念規定にかかわるには家庭科研究を中長期に亘って担う(非常勤ではなく)正規の教師が必要だ。また、本誌のねらいにもあるように広く家庭科研究の成果を広めていくことをさらに強化できたらと思う。

他地域のことだが公開研究会に出向き顧問校長先生に御挨拶すると「家庭科のことは、あまりわからなくて」と遠慮がちにお言葉をいただく。「遠慮しないでください」と申し上げたくなる。ある時、東部の市の学校訪問を経験した。校内研修のメインの授業は国語で題材は『大造じいさんとがん』だった。授業後の全体協議会で私は新たな感慨をもった。皆さんはもう慣れっこかもしれない。その協議会では、ほんの一行の解釈や価値をめぐってベテランも新人も議論百出だった。自分の研究経験を語り、その経験の前提まで共有されていた。「そういう説や解釈があることは知っている」というわけだ。

それに引き換え家庭科の教材研究の成果を、蓄積を、行間をどれだけの先生に、どれだけ共有できているか、それがそのときの感慨だった。研究成果の蓄積と新たな課題を、浜松市、県、全国と機会を逃さず小学校教師なら共有できるようアイデアを凝らしたいと思う。数年計画で「まど」のバックナンバーをそろえた全集の発刊を想像するのだがどうだろう。基金を募って実現したいくらいだと痛感している。



<「まど」第1部～まど400号によせて>

「まど」400号発行に際し、静岡大学名誉教授 吉原崇恵様、小学校家庭科部元顧問校長 高林 直子様、そして、静岡大学教育学部附属浜松小学校教諭 平野晶子様より貴重な寄稿をいただきました。御多用の中、無理なお願いに応じていただき、ありがとうございました。

さて、今回記念すべき「まど」400号に関わらせていただき、「私は、吉原研究室の学生であった」と振り返り、不思議なつながりを感じました。低学年を担当することが多く、家庭科の研修に関わる機会が少なかったからです。

これまで浜松市小学校家庭科教育の研究に携わってこられた多くの方々の意志を受け継ぎ、これからも益々充実した充実した「まど」となるよう努めてまいりたいと思います。

小学校家庭科部顧問校長 飯尾 智弘



小学校家庭科だより「まど」400号 おめでとうございます。

継続は力なり～継続は自信なり

小学校家庭科部元顧問校長 高林 直子

小学校家庭科だより「まど」400号の記念すべき発行に際し、寄稿の依頼をいただき大変光栄に思いました。

私が小学校家庭科だより「まど」に初めて出会ったのは、40年前、浜松市立和田小学校で教員としてのスタートを切った年でした。幸いにも私の教員免許の教科が家庭科であり、学年主任の百瀬和子先生が当時の浜松市教育研究会の副部長であったことが御縁で、家庭科だより「まど」のガリ版印刷をさせていただくことの仕事からでした。ロウ原紙に百瀬先生が鉄ペンで書かれた原稿を一枚一枚手刷りで印刷したことがとても懐かしく思い出されます。発送は浜松市小学校の家庭科主任の皆様にはもちろんですが、当時の文部省の家庭科の調査官にも送付させて頂き、直接指導を仰いでいたことに驚きました。



そして、今回400号発行を心よりお祝い申し上げ、現在に至るまでの浜松市家庭科部の皆様の着実な研修の成果と御努力の賜物に他ならないと改めて、感謝申し上げます。

私は現在、浜松市東区社会福祉課で教育相談員としての仕事をさせていただいておりますが、改めて学校教育の仕事の素晴らしさを身にしみております。そして、小学校教育における自立の一步でもある「衣・食・住」に関わる基本を習得できる家庭科の授業の大切さや必要性も強く感じております。

今後も浜松市家庭科部の皆様の益々の御活躍と御健勝を心よりお祈り申し上げるとともに、家庭科だより「まど」を退職した私にまでお送りいただきありがとうございますこと心よりお礼申し上げます。

家庭科について思うこと

静岡大学教育学部附属浜松小学校教諭 平野 晶子

私が、新採の頃、子どもに「ミシンなんて面倒くさい、どうせ使わないし……。できなくたって困らないのに。」と言われたことがありました。私自身は、子どもの頃から家庭科の授業が好きだったので、「面倒くさい、やりたくない、何のためにやるのか。」と思う子どももいるのだということ想像したこともありませんでした。しかし、改めて考えてみると、小学校の家庭科で学ぶ内容には、「自分で作らなくても、何でも手に入る時代なのに、手縫いやミシン縫いの仕方を学ぶ」「炊飯器があるのに鍋でご飯を炊く」「洗濯機があるのに手洗いで洗濯をする」など、子どもにとっては必要観を感じない内容があることに気付きました。そして、ただ子どもに「ミシンでエプロンを作ってみましょう。」「ご飯とみそ汁を作ってみましょう。」と投げ掛けるだけでは、主体的に学ぶ授業にはならないのではないかと、ましてやそれを家庭生活に生かしていこうとする態度を育むことなどできないのではないかとということに気付きました。そして、家庭科の各題材で学ぶ内容の意義について考えるようになりました。

本校では、教科は、ただ単に知識・技能を身に付けるだけではなく、先人たちの願いや探究の結果として生まれてきた文化に対する考え方や見方を変化させたり、広げたり、深めたりする「文化価値の再構成」をしていく場として捉えています。

私は、家庭科の教師として、それを家庭科に置き換えて考えてみました。家庭生活にかかわることの中には、先人たちが長い時間をかけて築き上げてきた文化が今に伝承されているものがたくさんあります。そして、そこには必ず何らかの「価値」があるはずだと気付きました。子どもにその「価値」に気付かせることで、子どもが「面白い」「調べてみたい」「やってみたい」という思いをもたせることができるのではないかと考えました。そして、子どもが興味をもって主体的に学ぶことができれば、それを家庭生活に生かそうとするのではないかと考えました。

例えば「縫う」という行為の起源は、石器時代にまでさかのぼります。そして、科学技術が発達した現在でも、「縫う」という行為は受け継がれています。そこには、「縫う」という行為に価値があるからだと考えました。そこで、子どもに、縫う以外に布を接着する方法について考えさせ、試させました。すると、ホッチキスやボンドなど様々な方法を試していくうちに、「縫う」という行為は、洗濯をしてもほつれることがない、丈夫で長持ちする方法だということに気づき、「縫うってすごい」というよさに気づき、それが「縫えるようになりたい」「縫ってみたい」という思いにつながることができました。

私自身、家庭科の授業をやればやるほど、新しい発見があり、家庭科で学ぶ内容は面白いと感じています。これからも、子どもに、家庭科で学ぶ内容に価値を感じさせ、「おもしろい、すごい、やってみたい」という意欲を喚起し、興味をもって主体的に学習し、進んで家庭生活に生かそうとする子どもを育てていきたいと思っています。

＜家庭科だより「まど」の歴史＞

昭和46年6月1日に「まど」が発行されて、今号で400号を迎えました。最初のころの「まど」は、漢字で「窓」。そして、もちろん手書きです。「まど」の題字を飾るイラストも、年代によって変遷してきました。

今の両側に窓がある形になったのは、316号(平成14年11月)からです。この316号は「まど」自体にとって、大きな変化のあった号です。それは、“メール化”の開始です。これにより、白黒印刷でなく、カラーで写真や資料を掲載することができ、より分かりやすく伝えることができるようになりました。

時代によって、「まど」の形も、内容も、そしてその形態も少しずつ変わってきたことが分かります。

☆300号以降の12年間の「まど400号」までの振り返り

304号(平成13年6月)

翌年から新指導要領へ。

5年生が10時間減で60時間に、6年生は15時間減で55時間になりました。ほころび直しや間食の工夫などが削除され、日常着の選び方や住居の働きなどは中学校へ移行しました。

また、相対評価から絶対評価になることで、評価規準を明確にする必要がありました。

そのため、当時の現場での戸惑いや準備の大変さが質疑応答からも伝わってくるものでした。

312号(平成14年6月)

学校週5日制の完全実施が4月から始まった。子どもたちの土日の過ごし方に一抹の不安があるものの、家庭で過ごすこの2日間への期待もありました。

それは、学習したことを家庭に返し、実践する時間的余裕があること、そして、何よりも家族と共に家庭で過ごすことで、家族の一員としての自覚を育むことができるのではないかという期待でした。

今では、当たり前になった週5日制。土日の休みを子どもたちは有意義に過ごしているのでしょうか。そして、家庭での実践が少しでも行われているのでしょうか。10年経った現状を知ることでも大事だと感じました。

337号(平成17年9月)

「食育基本法」の制定により、学校教育の中でも“食育”に取り組んでいくことになりました。

家庭科の研修会でも、厚生労働省・農林水産省から出された「食事バランスガイド」を用いて、“最新栄養学”と題して講話をいただきました。生活習慣病予防のために、食品を精選して摂取することや運動することの大切さを感じました。

335号(平成17年6月)

教科書から生野菜の調理が消え、サラダもゆで野菜へ移行。キュウリからブロッコリーやアスパラガスのゆでて食べる野菜が取り上げられるようになりました。

家庭科教育の根底にあるものは普遍です。これをその時々新しい視点で切り込んでいく実践が「まど」には多く掲載されています。今一度原点にかえる意味でも、「まど」を読み返すことが大切なのかもしれません。

まど「400号」発行にあたって

小学校家庭科部部长 増井葉子

小学校家庭科部では、「家庭生活と家族」の内容を中心に、小中5年間のつながりを考え、自らの生活から課題を見つけ解決する子どもを目指し、研修を進めています。

家庭科の授業を行う上で、子どもに家庭生活の様子を調べさせたり、話し合わせたりする場面を設定することがあります。そのたびに、子どもたちの家庭生活の変化や生活の仕方の大きな差を感じ、どのように授業を進めたらよいか壁にぶつかってしまいます。そんな中、「まど」から多くの励ましの言葉やヒントをいただいています。各学校の授業実践から「こんな実践をやってみよう」、「こんな教材もおもしろいな」などたくさん発見があります。どんなに生活が変化しても、昔から伝わる技術のよさや家族のつながりの大切さを子どもたちに実感させていきたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中、原稿をお寄せいただきました先生方に感謝申し上げます。また、今後とも家庭科部の活動に御支援・御協力をよろしくお願いいたします。



<編集後記>

400号を発行するにあたり、過去の「まど」を読みました。時代による違いもあり、大変興味深いものでした。そして、何よりも諸先輩方の家庭科教育への熱意が伝わってきました。時代が変わっても、生活の根底にある普遍的なものは学習の中でしっかりと押さえていくこと、時代によって変化したものや流行などをキャッチできるアンテナを高くしておくことも大切だと実感しました。

与進小学校 鈴木

<「まど」第2部>



☆第2回研修会報告☆

平成25年7月26日(金) 於：浜松市教育センター

<午前>

- 実践報告
新津小学校 丹羽晴香先生
- 実技研修／ランチョンマット作り
- 学生協から裁縫箱の説明

<午後>

- グループワーク
中学校区単位で各校の実践報告
- 指導講評
浜松市教育委員会 岡田芳樹指導主事
- 講話／静岡大学教育学部 村上陽子教授

浜松市教育委員会 岡田芳樹指導主事

「はままつの教育における家庭科・家庭分野の重点」

「はままつの教育」から

家庭科の目指す子供像：実践的な態度で、生活をよりよくしようとする子ども



実戦的・体験的な学習
小中連携により、「つなぐ」・「深める」

1 家庭とのつながり

- ・子供たちの興味や関心がどんなところにあり、どんな環境で育っているかを知ることが大切である。
- ・家庭環境に関係なく、自分でできることが見つけられれば自己肯定感も高まる。

2 体験の充実

- ・その授業の課題、何をやるのかを子どもが分かるようなものにする。
- ・言語活動の充実：思考力・判断力・表現力を充実させていく。
→コミュニケーション活動を取り入れればよいわけではない。

3 食育の推進

- ・栄養教諭や地域人材の活用
- ・地産地消を意識

4 消費者教育

- ・消費者としての権利と責任・・・他教科や総合的な学習の時間と連携して進めていく。

○言語活動の充実…体験を通して理解させるような言葉（沸騰・注ぐなど）

○学習後のワークシート／感想ではなく、分かったことを書く。

<言語活動の充実のために>

- ①知りたい事や質問したい事を聞くことができる声掛けをする（子供同士の交流など）。
- ②子供がじっくりと考える時間（2時間授業が良い場合も）を設ける。
- ③考えを発表させる。発表したあと、友達の考えを聞いて考える時間を作る。

<社会の傾向>

学校で家庭科を学んだが、「満腹になればいい」、「安ければいい」と食を軽視する。

<家庭科における食の問題点>

授業時数の減少、実習の時間確保の困難、内容の偏りなど

↓食に対する興味・関心が低い

しっかりと食物を摂取するように…「おいしそう」、「食べたい」の思いが大事

「飾り切り」を軸に据える。

☆「飾り切り」の学習の特徴

(1) 調理に関する知識と技能の習得

①切り方に関する知識と技能

きれいに切るためには、どんなものを選べばよいのかを知る。

②食材に関する理解

野菜の種類による細工のしやすさや旬など、食材について知る。

③調理過程と科学の関連

リンゴを塩水に漬ける科学的な理由に気付く。

(2) 調理文化への気づき

例) 菊花：食だけでなく衣服の模様にも関連。

(3) おいしさに対する見直し

☆「飾り切り」を用いる利点

- ・経験者がいないので、学習前から個人差がない。
- ・難しいイメージがあるので、課題に真剣にかつ、意欲的に取り組める。そして、できたときの達成感が大きい。
- ・材料や器具を選ぶ目が養われる。

☆「飾り切り」を取り入れることで得られる成果

- ・難しい切り方に挑戦することにより、できたときの達成感をもてる。
- ・自らが発見したこと・体感して得たことは身になる。
- ・技能が向上する。創造（想像）する楽しさを味わうことができる。

教材に対して、子どもだけでなく、教師が関心をもち、楽しむことが大切である。

<研修後の感想から>

- ・飾り切りは子どもにとっても興味深い、面白い視点だと思います。題材を工夫することで、学びの深まり、広がりがたくさんあると思いました。
- ・小学生では、難しいと考えがちですが、授業として成り立つと思いました。知的好奇心を十分刺激すると思います。
- ・何を教えるかという目標は要領で決められているが、どういう切り口で考えさせていくかは工夫次第だと感じました。専門家に学ぶべきところは大きいです。

